

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00438

研究課題名（和文）民族を共生に導く文化発信 クリギットの文化代弁者ノーラ・ダウエンハウアーに学ぶ

研究課題名（英文）How culture can be successfully introduced to bring inter-ethnic harmony:  
Learning from the Tlingit cultural emissary, Nora Marks Dauenhauer

研究代表者

林 千恵子（Hayashi, Chieko）

京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

研究者番号：10305691

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：ノーラ・マークス・ダウエンハウアー（1927-2017）はアラスカ先住民クリギット（トリギット）の口承物語研究の著作を出版する一方、講演やラジオ等、様々な機会を通じて伝統文化の解説を行った。本研究は、ダウエンハウアーの文化解説の特徴や社会活動の内容と影響を明らかにし、文化理解促進に成功した要因を明らかにするものである。研究の結果、革新的な作品による読者の獲得、作品と様々な社会活動の相互作用、偏見をもつ異文化の人々などへの地道な文化教育の実践、活動を通じての社会事情への精通、文学者の洞察力による文化解釈などが、ダウエンハウアーによる文化理解促進の成功要因であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ノーラ・マークス・ダウエンハウアーは夫リチャードとともに、アラスカ先住民クリギット（トリギット）の文化・言語の研究を牽引し、著作は学術的に高い評価を得てきた。しかし、著作や活動が社会や人々の意識にもたらした変化は注目されてこなかった。本研究は、ダウエンハウアーが行った多様な活動の詳細を明らかにし、地域社会全体で先住民文化理解が育まれていった過程を解明した点で重要である。現在、世界で民族間対立が頻発し、戦争回避と社会安定のために異文化理解教育がますます重要となっている。本研究で明らかとなったダウエンハウアーの地道な社会活動や著作の工夫などは、異文化間理解成功への重要な手がかりとなる。

研究成果の概要（英文）：Nora Marks Dauenhauer (1927-2017) published works on Alaska Native Tlingit oral narratives and provided commentary on their traditional culture through various opportunities, including lectures and radio. This study identifies factors that contribute to the success of Dauenhauer's promotion of cultural understanding by clarifying the characteristics of her cultural commentary and the content and impact of her social activities. The results of the study reveals that Dauenhauer's success is due to the following factors: the acquisition of readers through her innovative works, the interaction between her works and outreach, her steady practice of cultural workshops for people from different cultures with prejudices, her familiarity with social conditions through various activities, and her interpretation of culture through the insight of a literary scholar.

研究分野：北米先住民文学

キーワード：アラスカ先住民 文化の発信 民族共生 地名研究 先住民文化 ノーラ・マークス・ダウエンハウアー 口承物語

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

人種間や民族間の対立が止まない米国本土とは対照的に、アラスカ州南東部では、「白人」と先住民の共生・共栄が進んできた。それを象徴するかのよう、州都ジュノーの中心部には、アラスカ南東部先住民(クリンギット、ハイダ、ツィムシアン)の文化研究機関であるシーラスカ文化遺産研究所(Sealaska Heritage Institute/SHI)の威風堂々とした建物がそびえる。地元の地名や学校名は、従来のヨーロッパ由来の名前から先住民の伝統的名称へと次々に変更されている。地名変更は、非先住民が土地の歴史や先住民文化を理解し、変更を後押ししたといわれる。

少数民族が社会でこれほど存在感をもち、受容された理由の一つは、おそらくアラスカ南東部先住民族が運営するシーラスカ・コーポレーションの経済力にある。しかし、先住民文化に対する理解の深まりは、経済力だけでは説明がつかない。答えの鍵を握るのが、クリンギットの作家・詩人ノーラ・マークス・ダウエンハウアー(Nora Marks Dauenhauer, 1927-2017)(以下、ダウエンハウアー)だと考えた。

ダウエンハウアーは、クリンギット口承文学に関する著作を、夫のリチャード(Richard Dauenhauer, 1942-2014)と共著で出版する一方、あらゆる文化解説を引き受け、講演や新聞・雑誌やラジオ等を通して一般の人々に向けてクリンギット伝統文化の解説を続けた。研究者も一般の人々もダウエンハウアーの言葉を通してクリンギット文化を理解してきたと言ってよい。彼女の文化発信の反響を確かめ、解説内容を分析し、文化理解促進に成功した要因を解明したいと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、ダウエンハウアーの著作及び各種活動の記録をもとに、彼女の文化発信の内容や工夫の変化、著作や活動に対する反響を分析し、文化理解促進に成功した要因を明らかにすることを目的とする。具体的には、ダウエンハウアーの知名度を特に高めた後期の著作の分析をもとに、テキストの独自性と革新性を明らかにし、さらに、ダウエンハウアー自身も関わっていた地名研究プロジェクトの詳細と社会への影響を明らかにする。そして、最終的に SHI 文書館所蔵資料からダウエンハウアーの文化理解促進のための様々な活動内容と社会からの反応を分析し、文化理解促進が成功した要因を統合的に明らかにする。

世界各地で民族間の緊張や対立が激しさを増す現在、民族共生や異文化理解のための地道な努力が極めて重要になっている。ダウエンハウアー独自の解説や活動の内容や様々な工夫を解明することによって、効果的な異文化理解のあり方を明らかにすることを狙いとする。

### 3. 研究の方法

新型コロナウイルス感染症拡大により研究計画を変更し、2020年度~2022年度は国内で文献研究を実施し、2023年度に SHI 文書館で資料調査を行った。具体的には以下のように実施した。

#### (1) アラスカ社会及び先住民の社会状況に関する文献研究

主に Newspaper.com 及びアラスカ州立図書館の Alaska Newspapers Index を用いてダウエンハウアー夫妻が活動した時代の社会の状況と変化と、ダウエンハウアー夫妻の著作や文化発信に対する全米の反響を調べた。

#### (2) クリンギットの口承物語研究の変遷に関する研究

1800年代から現在までのクリンギット口承物語研究に関する主要論文と研究書を精読し、口承研究の変遷をたどり、ダウエンハウアー夫妻の研究の独自性と重要性を明らかにした。

#### (3) 2000年代出版の著作の分析

ダウエンハウアーの知名度を高めた『トリングット領アメリカのロシア人 シトカの戦い 1802年と1804年』( *Anóoshi Lingít Aaní Ká Russians in Tlingit America: The Battles of Sitka 1802 and 1804*, 2008 ) の分析を行い、内容の学術的重要性やテキストの構成の革新性を明らかにした。

(4) 地名研究プロジェクトの分析

先住民の長老からの聞き取りだけでなく、学校での学習等、地域住民を巻き込む形で展開したクリンギットの地名研究プロジェクトについて、研究の詳細や社会的影響についてトマス・ソーントン( Thomas F. Thornton )が編集した『わたしたちの祖父母が大地につけた名前』( *Haa Léelk'w Hás Aaní Saax'ú Our Grandparents' Names on the Land* ) と関連文献から考察した。

(5) SHI 文書館での資料調査と分析

文書館が所蔵する、主に 1970 年代から 1990 年代のダウエンハウアーの直筆原稿、書簡・電子メール、活動記録、報告書等を年代ごとに整理し、活動の内容、実施までの経緯、活動への反響や影響を明らかにした。

4 . 研究成果

研究方法(1)~(3)によって、ダウエンハウアーの著作が、欧米研究者の間で定着していた誤った文化解釈を的確な説明で修正しただけでなく、従来の研究手法や学術書のスタイルを問い直す革新性と読みやすさをあわせもち、学界と市場双方から高評価を得たことが分かった。

また、研究方法(4)により、ダウエンハウアーも深く関わっていた地名研究プロジェクトがクリンギットの文化理解促進に貢献したことが明らかとなった。

研究方法(5)では、夫妻の広範囲にわたる社会活動(アウトリーチ)が文化理解促進を支える重要要素であることが明確となった。従来知られてこなかった、夫妻の様々な陰の努力の詳細が判明しただけでなく、アウトリーチと優れた研究の相互作用が文化理解促進につながる事が裏付けられ、重要な発見となった。研究方法(5)で具体的に分かったことは以下の通りである。

SHI 文書館資料調査の成果

(1)コミュニティ支援の社会活動

ダウエンハウアーは、学会発表や講演、ワークショップ、朗読会に頻繁に参加しながら、その一方で、コミュニティの人々の教育や意識向上、生活支援のための様々な活動にも積極的に従事していた。口承研究3部作の出版前後の期間の主要なものだけでも以下の通りである。

	職歴上の主な出来事	コミュニティ支援の活動例
1976	アラスカ・メソジスト大学卒業(学位:文化人類学) アンカレッジ学区 先住民教育非常勤講師	・先住民教育の専門職員対象の研修
1978	シェルドン・ジャクソン・カレッジ クリ ンギット語講師 アラスカ歴史委員会委員	・クリンギット語授業 ・先住民言語の教育指導者養成
1979	クック・インレット先住民協会地域教育 局 文化コーディネーター	・文化コーディネーターの多様な職務 ・インディアン教育法プログラム公聴会参加 ・マークス・トレイル・ダンサーを率いて踊りを披露(アラスカ バイリンガル教育会議等多数)

		・『アンカレッジ・タイムズ』記事のステレオタイプの表現に強く抗議
1981	アラスカ大学ジュノー校 アラスカ先住民族学助教(1年契約)	・「塀の中の大学」プログラム支援 (アラスカ先住民の服役囚に文化コースと学術コースを提供) ・アルコール依存研究センターで講演 (題目「飲酒に関する比較文化入門」)
1987	<i>Haa Shuká</i> 出版	
1988	詩集 <i>The Droning Shaman</i> 出版	
1990	<i>Haa Tuwunáagu Yís</i> 出版	・アラスカ森林局職員対象 プレゼン
1992		・ジュノーのフィリピンコミュニティで講演(題目「ジュノーのフィリピン人コミュニティ形成におけるクリンギット女性の役割」) ・マークス・トレイル・ダンサーと踊りを披露 (ルーラルキャップ会議等多数) ・アリゾナ州パパゴ・リザベーション学校訪問 ・マウント・エッジカム高校に2名の北米先住民作家を引率して訪問 ・アラスカ州議会で SHF を代表してロビー活動
1994	<i>Haa Kusteeyí</i> 出版	マウント・エッジカム病院追悼式参加

\*講演、ワークショップ、学会発表、朗読会、メディアの取材等を除く

特に文化コーディネーターの仕事は、教員の採用と指導、教材準備とプログラム実施、研修企画と運営、フィールド・トリップの企画・準備と運営、プログラムの広報、活動記録まで、教育業務のすべてを一人でこなすことを求められるものだった。この職務を通して、コミュニティの人々とのつながりが深まっただけでなく、先住民教育の運営体制のあり方、求められる教授法や教育内容、先住民の若者の現状に対する理解が深まったことが推察できた。

## (2) 著作に対する評価と反響

ダウエンハウアーの著作のうち2作が、優れた文学作品や学術書に贈られるアメリカン・ブック・アワードを受賞していることが示すように、いずれも学術的に高い評価を得たが、同時に広く読者も獲得した。なかでも、クリンギット口承文学の入門書といえる『わたしたちの祖先』はアリゾナ大学をはじめ、米国とカナダの名門大学5校で教科書として採用され(1992~1993年)、1992年には3刷を重ね、口承伝統の研究書としては異例の売れ行きだったことが分かった。

一般読者からの支持を得た主要因は読みやすさにある。伝統文化に関する書籍が棚に飾られてはいけないというダウエンハウアーの信念で、知識のない読者が十分理解できるように、クリンギットの社会構成や言語や伝統に関する重要事項を平易な文章で丁寧に説明した。編集者に「読みやすさの手本」と称された学術書が、夫妻の評価と広範囲な活動を支えることになった。

## (3) アウトリーチの意義

全米の新聞各紙による取材や書評の評価もあったものの、著作の売れ行きや知名度の上昇に貢献したのはアウトリーチの活動であった。1992年2月のアリゾナ大学の朗読会では350~400

人が来場し、250人定員の講堂は床に座っても入りきらず、あふれた人々がロビーのテレビで視聴するほど盛況であった。著作の評判によって講演や朗読会の聴衆が増え、活動によって聴衆の反応やニーズの把握が可能となり、広報活動や次のプロジェクトへのヒントとなる循環が生まれた。

また、様々な活動は先住民文化に偏見をもつ人々も対象にして積極的に行われたことが分かった。たとえば、アラスカ海洋ハイウェイの職員が先住民の若者たちに差別的行為をしたこと（1979年）に抗議した際に、謝罪受入れと引き換えにワークショップ開催を提案し、相互理解への道を開いている。

#### (4)膨大な仕事量の背景

調査・研究と著述活動以外に、夫妻の活動の種類は多岐にわたり、二人は多忙を極めた。膨大な仕事量の背景には、彼らが運営に関与していたシーラスカ文化遺産財団(SHF)の資金難と人手不足があった。

調査研究、出版、コミュニティの人々対象の様々な活動、若者への教育などを持続的に行うためには、長いスパンでの資金と人手が必須であった。リチャードはその必要性を財団に訴えながら、当座の資金獲得の助成金申請と事務を含む運営業務に忙殺され、ノーラも財団運営のためにクリンギット語の記録や翻訳、音訳などあらゆる契約を引き受けた。皮肉にも、著作の評価や人気が高まると状況は悪化し、専門的な内容の質問に対応できるのが夫妻だけであるため質問や要請に摩耗しながら対応せざるをえなかった。

見方を変えれば、講演から地域の催事や州議会でのロビー活動にいたるまで、あらゆる発信の場を引き受けたことによって、文化代弁者ダウエンハウアーの地歩が築かれ、一般市民から政治家まであらゆる質問や声に直接対応するなかで、コミュニティの人々の事情やニーズに精通し続け、信頼が確固としたものになった。

#### (5)業績がもたらした社会変化

口承研究が学術的評価を得た結果、夫妻の研究者としての評価が高まり、シーラスカ文化遺産財団やそれが関わるプロジェクトの重要性も理解されるようになり、助成金獲得につながる等、好循環が生まれるようになった。また、無形の口承伝統や精神文化が、有形の大著として発表されたことで、自民族の文化に誇りをもてるようになったと感謝する声が朗読会の参加者等から届くようになった。

#### (6)文学者・教育者ゆえの成功

ノーラの講演の聴衆は伝統文化の「美しい解釈」に感動したという。「美しい解釈」とは、詩人・作家ダウエンハウアーの作品がそうであるように、主観的な言葉や冗長な表現が少なく、平易な表現で無形の伝統文化を的確に表現したことが関係していると思われる。また、ダウエンハウアーは、クリンギット文化の大きな特徴の一つに「相互依存 (reciprocity)」を挙げた。クリンギット社会が2つの半族間の婚姻関係で結びつくように、2者のバランスがすべてに通じている点が強調される。実際には、クリンギットの文化と言語は地域で大きな差異がある。しかし、多様な人々をつなぐキーワードを見出し、民族間、異文化間、自然界と人間の相互の調和を志向する解釈に、人々が共感したと考えられる。この彼女の「美しい」文化解釈が、コミュニティの人々のために教育体制を整え、共に文化を学び続けた姿勢とあいまって文化理解の道を切り開いたことが分かった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 林 千恵子	4. 巻 156
2. 論文標題 トリングットの口承物語研究の変遷 19世紀から現在まで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立民族学博物館調査報告 環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究動向	6. 最初と最後の頁 339-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00010005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 林 千恵子	4. 巻 17
2. 論文標題 ラッコの毛皮をめぐる19世紀の多民族間戦争ー『トリングット領アメリカのロシア人ーシトカの戦闘 1802年と1804年』と歴史記録への新たなアプローチ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 エコクリティシズム・レビュー	6. 最初と最後の頁 36-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 林 千恵子
2. 発表標題 先住民族の地名研究は何をもたらすのか Thomas Thorntonのプロジェクトがアラスカ南東部社会に与えた影響
3. 学会等名 エコクリティシズム研究学会 第33回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林 千恵子
2. 発表標題 口承物語の意味と重要性 アラスカ先住民トリングットの場合
3. 学会等名 民族芸術学会 第160回研究例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林 千恵子
2. 発表標題 ラッコの毛皮をめぐる19世紀の多民族間戦争ー『トリングット領アメリカのロシア人ー1802年と1804年 シトカの闘い』と歴史記録への新たなアプローチ
3. 学会等名 エコクリティシズム研究学会 第35回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------